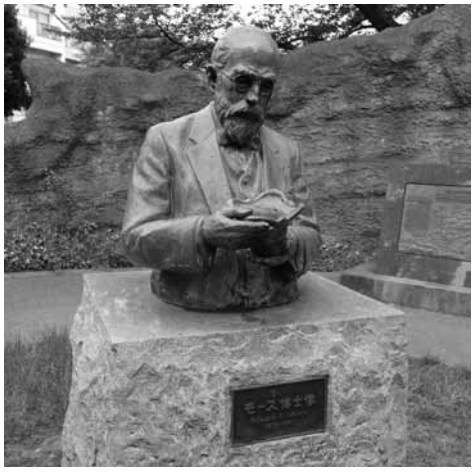
遺跡からのメッセージ（3）

遺跡がつなぐ過去と現在 ③

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

黎明期の考古学　―シュリーマンとモース―

今春、天理大学創立 90 周年を記念して、附属天理参考館で開催された企画展「ギリシャ考古学の父　シュリーマン」では、ギリシャの古代遺跡ティリンス遺跡の発掘調査報告書の図版作成に用いられた原画 28 枚（天理参考館所蔵）が初公開され、多数の来館者が足を運んだ。1884 年から 1885 年にかけてシュリーマンが行ったティリンス遺跡の発掘調査の報告書は、独仏語版が早くも 1884 年に出版され、翌 1885 年には英語版が世に出ている。モースが来日して大森貝塚を発掘調査した 1877 年、そして、報告書を出版した 1879 年から数年後のことなので、ほぼ同時代の出来事といってよい。



大森貝塚遺跡庭園内のモース胸像（筆者撮影）

モースが後年（1917 年）、3 度にわたる来日中の日記をまとめて出版した "Japan day by day"（邦訳は『日本その日その日』）には、数百枚のスケッチが添えられ、明治期の日本の生活や文化の貴重な記録となっている。シュリーマンもまた来日をしたことがあり、モースより早く、今からちょうど 150 年前の 1865 年、清国と幕末の日本を歴訪し、1869 年に簡単な旅行記を出版している。シュリーマンは、その 2 年後、1871 年に、トロイの遺跡だと考えたヒッサリクの丘で発掘調査を開始し、『トロイアの古代遺跡』の独仏語版 1874 年、英語版を 1875 年に刊行したことで、一躍、注目を集めることになったのであった。

シュリーマンは、『トロイアの古代遺跡』（1874 年）では、調査の進展を追って、日を追ってリアルタイムの日記風に叙述する伝統的な旅行記の体裁を踏襲している。しかし、10 年後に刊行されたティリンス遺跡の報告書（1884 年）では、建築家でもあったデルプフェルトの助力を得て、発掘された建築遺構の詳細な平面図とともに、出土した彩文土器破片などの正確なスケッチ図を図版に添えて記載した。アガメムノンのマスクの発見で有名なミケーネ遺跡の発掘（1876 年）をはさんで、考古学の報告書がようやく科学的な体裁を取るようになったのである。デルプフェルトは、その後、トロイ遺跡の発掘調査にも参加し、近代考古学の柱のひとつ、層位学的な発掘調査方法が、その調査を通して確立することになった。19 世紀後半は、このように、世界的に見ても、まさに考古学の黎明期なのだった。

大森貝塚報告書と印刷技術

参考館のシュリーマン展では、ティリンス遺跡報告書の色鮮やかな原画だけでなく、報告書そのものも天理図書館が所蔵する実物資料が展示され、色彩があせていない印刷図版をつぶさに観察することができた。印刷に用いられたのは、当時の印刷物に多用された多彩リトグラフ（石版）の技法であった。

モースが刊行した大森貝塚の発掘報告書 "Shell mounds of Omori"（英文）と『大森介墟古物篇』（和文）は、発掘 90 周年を記念して、1967 年、その印影が解説や関連資料とともに刊行され、また、発掘 100 周年のあと、岩波文庫の一冊として『大森貝塚』（1983 年、近藤義郎・佐原真による新訳）が刊行され、筆者の手元にもある。しかし、今回、天理図書館所蔵の原本（英文編と日文編を合冊製本）の閲覧を行い、ページを開いてみることにした。やはり貴重な実物資料の「鑑賞」は味わい深いものである。図版は、ティリンス報告書と同じくリトグラフの技法を用いているが、こちらは単色となっている。モース自身による貝類の精密な図を除き、残りの図すべてを日本人の絵師が描いた。

報告書の序文で、モースが誇らしく記しているのは、日本人による製図と石版刷りの技術の高さである。植字から製本にいたるまで、本造りの技術面は完全に日本人の手で行われたことを特筆したのである。これに対して、『ネイチャー』（第 21 巻第 537 号、1880 年）に書評を寄せたフレドリック・ディケンズは、石版技術と紙、活版技術の良さを認めながらも、日本人があたかもかしこい野蛮人であるかのように褒めるべきでないと不平を述べた。つまり、日本人は、ヨーロッパの機械で、ヨーロッパ人の監督ないし指示の下で報告書を作ったのであり、ほんの数十ページの印刷をまあまあの明瞭さと正確さをもっておこなった、という驚くに当たらない芸当を演じたに過ぎないと記したのである。『ネイチャー』（第 21 巻第 546 号、1880 年）では、モースがこれに反論し、日本人の過ちをみると稚気まんまんに喜び、成功をみて冷笑する、という在日英国人に通有の特性を例証するとして、ディケンズの度量の狭さを嘆いている。明治の日本が、欧米から学びつつ近代化にまい進していた文明開化の時代の雰囲気を伝えるエピソードである。

モースは、『日本その日その日』で、大森貝塚発掘の簡単な経緯、出土資料の幾つかの紹介をおこなった後、大学には図を描くための石版用の石材が数多くあり、大学が調査成果の出版と海外の諸学会への送付を約束してくれたことを記している。また、大森貝塚の発掘報告書が一連の科学的出版の始まりとなり、それらの諸機関との交換が科学的な図書館の建設につながるという期待も記している。このように、モースは、日本滞在２年間の間に、近代動物学を導入し、大森貝塚の発見・発掘で日本の考古学・人類学の幕を開いただけでなく、東京大学生物学会 (現日本動物学会) を創設し、東大に進言して日本最初の大学紀要を発刊させ、博物場を新設させるなどの多くの功績を残したのであった。

モースは後年も日本を忘れることなく、大正 12 年（1923 年）9 月 1 日、関東大震災で東京帝大図書館の数十万の蔵書が灰となったのを知り、1 万 2 千冊の蔵書を東大に寄贈している。今回は、モースの食人説について書くつもりが、つい寄り道をしてしまい、しかも千鳥足で、なかなか先に進まない。（続く）